様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：２４５０６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３２３２

研究課題名（和文）災害への心の備えと具体的行動化を促す『小児病棟用ケアパッケージ』の効果検証

研究課題名（英文）Varification of "Care Package for Pediatric Wards" as a tool to increase prepardness in action for disaster

研究代表者
三宅　一代（MIYAKE, KADUYO）

兵庫県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：５０３６４０４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：「小児病棟用ケアパッケージ（注１）」を活用した3分間シミュレーション（注２）を実際に臨床で導入した施設の看護師12名（8施設）に質問紙調査とインタビュー調査を行い、効果検証を行った。その中で具体的にどのように活用したかを明らかにした。これを『実践編』として小冊子を作成し、災害看護の備えの啓発活動につなげていく予定である。注1：小児病棟における災害への感受性を高めるツール注2：勤務前の３分間を活用し、病棟で勤務する各看護師がケアパッケージを活用しながら「もし今、この勤務帯で災害が発生したら」を想定し、そのときの自分の行動を頭の中でシミュレートすること

研究成果の概要（英文）：This study is to varify the effectiveness of "Care Package for Pediatric Wards" with three minutes simulation as effective tool to make preparedness for isaster of the nurses working in the hospital ward.Questionnaire and interview were conducted to 12 nurses (8 facility) who had been continued to use the actual clinical 3-minutes simulation and a "Care Package for Pediatric Wards *"Through the interview, it was found that the nurses were translating care package to fit their own situation. It seems that these exemplar of action can be arranged to be useful practice guide. It is also useful in the educational activities of preparing the nurses for disaster.＊“Care Package for Pediatric Wards” is developed for the nurses to use daily to increase thier sensitibity for disaster preparedness in their ward.It ontained minimum review points which they can carried out within three minutes of their starting time in their shift work.

研究分野：小児看護学

キーワード：災害看護　小児看護学　ケアパッケージ　備え　減災

１．研究開始当初の背景

2003 年度より 5 年間、兵庫県立大学看護学部 21 世紀 COE プログラム－ユビキタス社会における災害看護拠点の形成－看護ケア方法の開発プロジェクト小児班として、『小児病棟用ケアパッケージ』（看護師の災害への感受性を引き出し、高めるための日々の勤務の中で活用し続けるツールの開発と検証）を行った。災害発生時に病棟に入院している子どもたちを守るための方策を検証する研究活動を行い、日々実施する災害を具体的に想定したシミュレーションが有効であることが明らかとなった。[1] そこで、ツール『小児病棟用ケアパッケージ解説編』と『小児病棟用ケアパッケージイメージトレーニング編』を活用した勤務前の 3 分間で行えるシミュレーション方法を開発し、病棟に勤務する看護師の災害に対する感受性を引き出し、高め、高まった感受性を継続させるための研究活動を継続している[2]。これは、災害時にあっても子どもたちの入院生活・治療が継続できること、つまり病棟機能の早期回復が子どもたちの健康生活再生力の促進につながるため、看護師ひとりひとりが子どもたちを守るための方策について取り組む必要があることが課題となった。しかし、これまでに災害を体験したことがない看護師は、「いつ災害が発生するか分からない」「何かしなければいけないと思うが何をすればいいのか分からない」「普段の業務で手一杯」と、漠然とした不安を持ちながらも災害に対する意識は低く、防災対策に対する消極的な状態が明らかとなった。そこでまず看護師の災害への感受性を高めるきっかけが必要と考え、「勉強会」を実施した。勉強会では、阪神淡路大震災を体験した看護師のインタビュー調査の結果、震災直後の病院・病棟の写真をみてもらい、災害発生時病院や病棟がどのような状況に陥る可能性があるのか、その時に備えて各看護師が日頃から災害発生時を意識したシミュレーションが重要であることを説明した。この結果、勉強会が災害の疑似体験となり、今取り組む課題としてとらえることにつながり、ツールを導入する動機づけとなっていた。導入後は、看護師の漠然とした不安は、「これで本当に子どもたちを守れるか？」「ほかの人は同じようなシミュレーションをしているのか？」といった具体的な不安へと変化した。この具体的になった不安は、事務や医師を巻き込み具体的な患者対応の方策を考えることや、病院関係者だけでなく、患者と家族を含めた病棟防災訓練の計画実施に至った病棟もあった。ここからも、看護師の災害への感受性を高めることが、防災対策の行動力につながっていくということが明らかとなった。研究期間中にツールを活用している施設は 12 施設、59 病棟であり、それぞれの病院または施設での取り組みを研究成果として、学会や雑誌に発表することで、研究に参加した方々の災害に対する感受性を継続させる力となっている[3]。またこれをきっかけに「自分たちも行ってみたい。」というツールに関する問い合わせが増え、全国の病院に勤務する看護師が病棟あるいは病院単位で災害に対する取り組みと自己評価を行えるように、アンケートシステムと『小児病棟用ケアパッケージ DVD 版』を開発し、より多くの方が取り組むツールへと修正を行った。2008 年から現在までに、『小児病棟用ケアパッケージ』を導入した施設は約 20 施設である。

2. 研究の目的

（1）研究の意義

『小児病棟用ケアパッケージ』の導入は、病院・施設に勤務する看護師の災害への感受性の促進につながり、研究終了後もそれぞれの病棟の防災活動として業務に定着する結果につながった。これは、研究導入時の看護の現場の声や映像等から災害の疑似体験つまり『自分の身に引き寄せる体験』となり、自らの病棟用にアレンジする過程が『私たちが子

どもたちを守らなければ』という具体的に考える機会となって、災害を非日常から日常へと意識の変容が災害の感受性に大きく影響していることを先行研究で明らかにした。今回の研究の成果として、導入施設の災害への備えの具体的な現状が明らかになれば、昨今日本各地で発生している災害に対いし、災害の感受性と高めるツールと具体的な備えに関する知識や技術を該当施設に対して還元できる。これは、災害発生時により多くの子どもと救うことや心の備えができることで被災後の看護師の精神衛生に貢献できると考えている。

具体的には『小児病棟用ケアパッケージ』は、現在『DVD 編』で災害時病棟がどのような状態になるかの疑似体験とパッケージの使用方法を解説したものと 3 分間でシミュレーションができるようにいつも名札に入れて持ち歩く『イメージトレーニング編』、その項目を分かりやすく解説した『解説編（小冊子）』で構成されており、現在はその病棟独自に追加が必要な項目については話し合いをもち決定するプロセスが必要であり、導入からパッケージ活用までの時間を要し、具体的な方策については提案をしていない。そのため今回の研究成果を『活用編』としてパッケージに組み入れることで、より活用する看護師の施設に合わせた方策を考える媒体として還元できると考えている。

(2)研究目的

『小児病棟用ケアパッケージ』を 2008 年から 2012 年に活用した約 20 施設の看護師に質問紙ならびに面接調査を行い、『小児病棟用ケアパッケージ』の導入方法や活用状況、病棟に合わせて追加した項目や導入による具体的な備え行動、『小児病棟用ケアパッケージ』活用による具体的な効果などを明らかにする。その結果をふまえ、小児ならではの災害への備えの特性の明確化、ICU、手術室、外来など場の違いによる備えの特性などがあるかを分析する。その成果を小児が療養する施設での災害への具体的な備えとして社会に発信する。

3. 研究の方法

(1)研究方法：調査研究

(2)データ収集方法

①質問紙によるパッケージ導入までのプロセスや活用状況等の予備調査

②その質問内容とインタビューガイドに沿って、半構成的インタビューを行い、録音を行う。その内容について逐語録を作成する。

(3)データ分析方法

『小児病棟用ケアパッケージ』の導入方法や活用状況、病棟に合わせて追加した項目や導入による具体的な備え行動などを明らかにする。その結果をふまえ、小児ならではの災害への備えの特性の明確化、ICU、手術室、外来など場の違いによる備えの特性などがあるかを分析し、スーパーバイズをうけながら分析内容を洗練させ、活用の実際を明確化する。また、『小児病棟用ケアパッケージ』を導入後に災害に遭遇した場合、『小児病棟用ケアパッケージ』が実際に役立ったか具体的な内容を明らかにする。

(4)調査期間

2012 年 10 月～2015 年 3 月

(5)対象者

2007 年～2012 年にケアパッケージを導入した施設で、導入を希望または活用の中心となった看護師 1 施設１～2 名、本人の同意ならびに施設の了解が得られた看護師。

(6)倫理的配慮

研究協力者の選定のプロセスで、対象者へは研究参加が自由意志であること、いつの時点でも研究参加を拒否できることを書面で説

明し、研究協力の意志を確認した。その上で管理者からの了解を得る方法をとり強制力を排除した。本研究は、研究者が所属する研究倫理委員会の承認を得て開始した。

4. 研究成果

(1)対象者の概要

ケアパッケージを導入した施設は、16 施設中 8 施設の看護師より質問紙の回答が得られた。施設の内訳は、専門病院 1 施設、総合病院 6 施設、療育施設 1 施設であり、インタビューには 12 名の看護師の協力が得られた。

(2)ケアパッケージの導入時期

平成 18 年～24 年であり、全施設が何らかの形でケアパッケージを継続して活用していた。

(3)ケアパッケージ導入するに至った経緯

大規模災害の発生による危機感や防災マニアルの見直し、看護研究、小児看護の学会でのテーマセッションがきっかけとなっていた。ケアパッケージを導入するまでに、災害発生時のアナウンス内容の追加、病棟の管理台帳と統合させた項目シートの作成など各病棟に合わせて変更や追加を行っていた。

(4)ケアパッケージ導入の効果

全施設が非常電源や避難経路についてスタッフ自身が確認するようになったなどケアパッケージ導入後の看護師の行動や言葉からの効果と、ケアパッケージの項目を防災マニアルに取り入れた、病棟日誌や感染症の情報シートをケアパッケージと融合するなど既存の様式を活用する、または改編することで業務の中に取り入れる工夫がされており、パッケージを業務の中に取り入れるという効果も見られている。

(5)ケアパッケージ DVD 版の効果

DVD 版は、研究者の説明がなくともケアパッケージが活用できるようにと最終的に作成した成果物である。本来の目的であるケアパッケージの活用方法と看護師からの声と映像はインパクトがあり、ケアパッケージの導入としての効果があったと全ての看護師が答えた。しかしながら DVD の内容の中で、既に取り組んでいる施設の方法を見ることで方法が規定されるという意見とその方法を取り入れたという両極端の意見も聞かれた。

(6)ケアパッケージの追加修正

項目としては、長期滞在型の施設においては、学校や訓練等で病棟を離れることが日常化しており、経時的に確認できる「こどもが何処にいるか」の項目の追加を提案された。その他の追加項目はなく病棟にあわせて考えることで網羅できると回答した。

(7)ケアパッケージ全体の効果

ケアパッケージを導入しての効果は、全員があると回答しながらも、このパッケージでは各自でイメージすることを依頼したが、実際には導入者である看護師は、それぞれがイメージトレーニングをちゃんと行えているかの確認が必要、イメージトレーニングを実践している看護師も自分の考えが合っているかなど、双方に確認したい思いがあり、読み上げる、確認する、復唱するなど「声を出す」方略を取り入れていた。

(8)考察

ケアパッケージの導入効果は、日常的に災害を考えるツールとしての効果を得られたと言える。しかしながら、このパッケージはこどもが生活する病院・施設といった多種多様な地域性や建築の有り様などに即してはおらず、具体的にどうするかまでは網羅できないというツールの限界も明確となった。その限

界を越えて、看護師は、防災訓練の内容を変更する、評価指標を変更するなど勤務する自身の施設にあった方法でパッケージを活用し続けている。この背景には、導入時に中心となった看護師の災害への感受性が高く、維持できていることが病棟スタッフの取り組みに影響していると考える。また今回の対象者は、自身の取り組みを研究として公表している看護師が多く、調査後の対象者から『ケアパッケージの活用に加えて、月に 2 回実際の訓練を行うことになった』などの報告があり、研究発表や今回の調査など施設の取り組みが他者から認められる体験が災害看護の感受性を高めることにつながっているのではないかと考える。

(9)今後の展望

本研究の成果を「小児病棟用ケアパッケージ実践編」として、小冊子を作成した。これから災害への備えを始めようとする方々や活用をし続ける方々への更なる備えの意識や具体が広がる研究ならびに啓発活動を行っていきたい。

＜引用文献＞

①片田範子・勝田仁美・岡田和美・小迫幸恵・三宅一代　看護ケア方法の開発プロジェクト－小児班－，兵庫県立大学明石キャンパス 21 世紀 COE プログラム－ユビキタス社会における災害看護拠点の形成－平成 15-16 年度２年間活動報告書 p.91-152.2005.03.

②片田範子・勝田仁美・岡田和美・小迫幸恵・三宅一代　看護ケア方法の開発プロジェクト－小児班－平成 17 年度活動報告書，兵庫県立大学明石キャンパス 21 世紀 COE プログラム－ユビキタス社会における災害看護拠点の形成－.2006.03

③秋山明美・大須賀美智　重症心身障害児(者)施設における防災用「小児病棟用ケアパッケージ」導入の試みとその効果　日本重症心身障害学会誌 32 巻 2 号 p.226　2007.

5. 主な論文発表等

［学会発表］（計１件）

①三宅 一代，片田 範子　災害への心の備えと具体的行動化を促す『小児病棟用ケアパッケージ』の効果検証(第１報) 日本災害看護学会誌 (1345-0204)15 巻 1 号 Page246(2013.07) 札幌コンベンションセンター（北海道札幌市）

6. 研究組織

(1)研究代表者

三宅　一代（MIYAKE, Kaduyo）
兵庫県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：50364047

(2)研究分担者

片田　範子（KATADA, Noriko）
兵庫県立大学・看護学部・教授
研究者番号：80152677